

ドナウ通信

No. 45

目 次

日本人会からのお知らせ	野田 悟	2
古さを風呂敷に包んで差し上げる 次の世代の日本人へ	糠沢 和夫	3
国境に響け 安城の歌声！	糸見 偲	7
風景を読む	盛田 常夫	9
会社指導報告より	勝岡 宣夫	13
補習校児童作文		
小野田 優 手島 慎平 大田 寛朗		20
近藤 麻美 藤谷 有希子 横山 知沙		
20世紀を創ったハンガリー列伝（その三） 「ノイマン・ヤーノシュ」マルクス・ジョルジュ		23
日本人会運動部報告		36
掲示板		40

日本人会からのお知らせ

日本人会の法人化について

日本人会会長 野田 悟

ハンガリー日本人会は、その発足以来、ハンガリー法において登記された団体ではなく、親睦団体的な形態で活動をして参りましたが、近年その活動に制約・支障を受けることが多くなってきたこと、又、今般、ブダペスト日本人補習校がやはりその活動上、非営利団体としてハンガリー法人化に踏み切ることとなり、両団体の実質的中核・支援団体であるブダペスト日本商工会において、これら日系三団体の今後の在り方について、諸外国の日本人会、並びに、在八諸外国商工会等の組織・ステータスを参考に検討を続けた結果、当ハンガリー日本人会をハンガリーの民法上

の「SOCIAL ASSOCIATION」として登記し、商工部会（現在の商工会）と日本人補習校をその下部組織として統合した組織に二〇〇一年より改編する基本方針案が固まりました。

この組織改編・法人化によって、日本人会と言う一つの核の中に日系団体が集結し、より強固な組織とすると共に、活動の範囲を更に広げて行くことを期しております。

会員の皆様の会費ご負担等については、基本的には従来と日本人会と変更は生じません。

本件については、現日本人会会則に則り、一二月に開催予定の総会において、会員各位の賛否の採決を以って最終決定と致しますが、事前に総会のご案内にてその詳細をご連絡申し上げますので、予めご理解置きいた

だきたくお願い申し上げます。

古さを風呂敷に包んで差し上げる

次の世代の日本人へ

糠沢 和夫

退官が近い。ハンガリーのことは心配してない。むしろ、遠く日本を思いやり、憂いに胸が痛む。どこが間違つて、僕らは日本を、恐山のよくな凶まがしい声ばかり聞こえる社会にしてしまったのか。

いや、明るい所に目を注げ、と言う声も聞こえる。僕もそう言ってきた。故小淵首相も、コップが半分空だと言わずに半分も水が入っていると考えよう、と呼び掛けた。これを言わねばならなくなつた時、彼の内心がどんなに淋しかったか。“あめゆじゆとてちてけんじゃ”(宮沢賢治、「永訣の朝」と言つてる瀕死の妹に、椀半分の雪を差し出せるか。七月末に東部で馬術大会に臨み、

世界チャンピオンの御者が手綱を引く四頭立て馬車に乗って、晴れがましくも場内を三周したが、逸る駿馬を御するものの幸福を思つた。

国民に元気が無く、若者が魂の奥を病んでいる時代の指導者は、自分の心にも響かぬ明るい楽譜を売らねばならないのだ。世の木鐸たるべき新聞もまた、紙面の上部に卓説を掲げ、下部に“なべて人間は下品なものさ”という色情狂雑誌の広告を、身過ぎ世過ぎで並べている。どこで間違えたのか。

勇氣と廉恥

全てをバブルの所為には出来ぬ。バブルの底にあつた土地信仰は、ある程度は止むを得なかつたし、そこまではどこの国にもある。その反省なら、もう済んだ。残るは後片付けと責任の取り方で、これも筋はハッキリしている。

むしろ、僕らの処世の態度に、流

れに一人で抗する勇氣が欠けていなかったか。

決定的瞬間などと言うが、実は目も眩むような墜落は、かすかに坂を下る時のエンジンが気楽そうな音を立てている時に始まる。

崖の手前に差し掛かつた時はもう遅いのだ。かすかな変化に気が付いて、窓から首を出して四方を眺め、「一寸車を止めてみてくれないか」と口に出して言うかわぬか、それがインテリの役割だつたはずだ。

第二次世界大戦でも、獄中の共産黨員以外はみんな我が身大切で、ミネルヴァの梟のように、夕暮れを待つて辺りを見渡しながら漸く飛び立つたのだつた。

知識を持つて、世に居場所を許された僕らには、一〇年に一度、二〇年に一度、真の働きを示す場面がある。それ以外は、書を読み剣を磨いていれば良いのだ。

そう言う場面に一生に一度も遭遇

せねば、精進の酬い、世の幸せだ。

月給泥棒と言われてニヤツと笑って死ねば良いのだ。どうして、物を言うべきときに、言うべき人に対して言えなかったか。今評判の「朗読者」(シユリンク著、新潮社)は、ナチに結果的に巻き込まれた女のケースだが、僕らにはそういう言い訳はきかない。変な感じはしていた。それを、言わなかった。

「そういう場じゃない」「それを言ったら白ける」。ああ、機会を逃した。真つ青になって「私にはそうは思えぬ」というのが真の人間だった。もうチャンスはないだろう。

一流大学を優秀な成績で出た銀行の友人達が、競ってアブクのようなプロジェクトに貸し込んだ。彼等がいかに僕らに良く似ているか。

自分が案件にペケを付ければ、「X常務はガッツが無い、話の判るY常務に持つていこう」と行内の人気はYに集まる。可愛い部下が寄

つて来なくなれば淋しい。

愚行の苗床は小心者の愛情だ。踏み外した者の新聞記事を見てみると、ときどき牢屋に行つて手を取つて共に泣きたい気がする。東京に来て郷里の星と見上げられていた人が、ここ数年で、次々と世の中に居場所を無くした。

何度も後悔しているだろう。家族が漸く父を許した頃には、人眼の届かぬ裏道を家族と宵に散歩するくらい見逃して上げたい。

さて、常識に逆らう勇氣はどこか

ら手に入れたら良いのだろう。勇氣に付いての二〇世紀最大の思想は、ガンデイ主義だと思ふが、それは「権力の犬」の胸になお残る善性を信頼するものだった。その善性は、「上司の命令」の鞭を必ず振り切らせる。その時点まで、こっちは真つ青になつて、打たれ続けるのだ。ヤツパリかなり難しい。棄てるものが多すぎ

る。私の今の結論は、宗教心という湖から余り離れた所には勇氣の花は咲きにくい、と言うものだ。古い。だが、パソコンの画面からひよいと啓示を受けるような訳には行かない。世の中には、静かな長い時間が必要なこともあるのだ。

眼中の人という言葉がある。目を閉じても自ずと瞼の裏に浮かび出てくる人だ。恩師、親友。恋人なら尚い。その人だけには、卑怯な人間だと思われたくない、そのくらいなら

死んだほうがマシだ、と思える人がいれば、坂の前で“止メ口、止メテクレ”と震えながら叫べるような気がする。

ここまで書いて、昔の「ポールとヴィルジニー」という小説を思い出した。古風ついでに、書き留めておく。作者名は覚えていない。海中に投げ出されたヴィルジニーが、体にまとわり付く衣装を脱げば生き残れるのに、好きなポールの目前でそうする事を潔しとせずに、やがて波間に没する。これは極端だ。でも、羞恥心が無くなれば、廉恥は喪われ、名誉はダンピングされる。うん、古い。それで上等だ。

消費と生産

長い間、産業界から世の中を見てきた。盛田・本田・松下など世界の工業史に出るような人の警咳に接し得た事は、自分の一生の得と思っ

私は生産する人が好きだし、現場も好きだ。消費者が王様だなんて、露思わぬ。

消費なんか誰でも出来る。電車の中でブランド物のポシェットなんか持つてる茶パツのほうがかつと消費するから、これは超神様か。

赴任直前の九八年の三ヶ月にワシントンD.C.で日米関係についてセミナーに出席して、開口一番言ったのはその点だ。

「エディソン、カーネギー、ロツクフェラー。生産者の偉人伝は見るが、消費者の伝記など目にした事はない。アメリカ人だつて内心は生産者、工夫する人、が大好きの筈。ロツクフェラーも毎日孫娘に三〇セント上げて、一〇セントは貯金せよと教えていたろう。

勤労、節儉は変わらざる美德だ。

やたらに他人のお金で、コンピュータのキーボードを叩いて、瞬時に数百万ドル儲けたりするのが偉い

だなんて、なに言つてんだか。

自分が好きなら、それをやっても良いけど、人の国に来てまでもっと需要を喚起しろ、消費しろってオカシイ。そんなに消費したら、CO2も、NOxもSOxも、地球はどうなるのか」といった。

昔からの知人で、アレクサンダーといつて、もと国防省にいた男が、そうだそうだ、と言つてくれた。経済をやつてる、顔見知りの連中もいたが、“なに、引かれ者の小唄か”という顔をしていた。その面もある事は認める。だが、経済学をやつてるものの志が、資本主義が共産主義に勝つてから酷くなつたのも本当だ。

没価値的に技術論に埋没し、「倫理はうちの店では扱ってません」と言う顔だ。

六月に、沼川という、環境の中東欧地域における協力推進機関の十周年記念に出席して開会スピーチをした。EUの環境委員の女史とアメリカ国務省の男の後だった。

「この十年間、日本は沼川の沼川出資者だった。出資を決めた一九九〇年当時は、前年末の株価が三万九千円台だった。今は一万六千円だ。

そう言う訳で、日本人らしい Characteristic Modesty を發揮して、ごく最近 NO.1 の席を他国に譲る事になった。

でも、お金を出してきた事は、後悔してない。日本人には東洋思想の因果・輪廻の思想があり、人に功德を施せば我が身にも及ぶ。この考えで遠い中・東欧を支援してきた。

春になると中国から黄沙が飛んでくる。病原菌も乗ってくる。砂漠化

が進んでいるからだ。全く困る。東欧も五〇年も共産主義の下で、環境の悪化を経験しているのだから、よく分かるだろう。環境問題は、国際協力して解決しなければならぬ。

さて、ZOOMES の日曜版は六〇〇ページもあるが、一三億人の中国人がこれを真似したら、世界に森がなくなつて、みんな博物館に樹を見に行くようになる。CO2 を放置したら、島も低地国も無くなる。

もう、文明のあり方、新しいライフ・スタイル、alternative way of life を求めねばならない。そこに日本も、欧米も協力を進めるべきだ。

今は、東欧のセンターに日本が積極的に協力しているが、アジアでも国際協力が必要になる。時至らば、欧米に寄進を請いに来るからよろしく願いたい。結構受けた。

こっちは役人の書いたものでなく、腹の底から話してるんだ。言えば判る。アメリカのバブルが壊れたら大

変だから、協力して潰れない様にして、よう、と言う理屈は分かる。しかし、今の形のままで成長すれば、環境に大きな負荷を掛けるのだから、小聲で協力を求めるべきで、人の胸に指を差して難詰するのが聞いてられないのだ。消費礼賛は要するに欲望の無限抱擁だ。その顔でしゃあしゃあとして踏みつける厚底靴は倫理だ。リストラムも消費奨励も恥ずかしそうにやって欲しい。古い？ そうだ、それがどうした。以上。

国境に響け 安城の歌声！

糸見 徳

二〇〇〇年八月一九日、フェイトウラー・コシユの洞窟にベートーベンの第九シンフォニーが響いた。

コーラスは総勢二〇〇人。その中には安城学園吹奏楽部の一〇四名もいた。

彼等は得意の楽器を吹くのではなく。コーラスの一員として参加した。コンサートの前日、事の重大さを感じ、尻込みする合唱指導の先生を必死に説得し、やっとの思いで承諾してもらった。

上手く歌えなくても良い。みんなと一緒にあってベートーベンの人間の讃歌を歌って欲しいと、私は思っていた。

私がこのレセプションで最初のベートーベンの「第九」コンサートを

開いたのは、一九九六年の八月一日。ヨーロッパ・コンサートと名付け、今年で五回目になる。

毎回、日本の人達にも参加してもらい、その都度、沢山の人々に感動を与えている。

「どうして八月一九日なのですか」と聞かれる都度に、私は、この日にこだわる理由を話す。

一九八〇年代の後半、東欧には政変の兆しがり、目に見えない静かな動きが脈打ち始めていた。

八八年の秋に、ハンガリーは難民条約に加盟し、それをきっかけとして、八九年の四月にはオーストリアとの国境に張りめぐらされている鉄条網の一部が切り離された。

そして、そこに自由の光りを見出した旧東独の人々が夏休みを利用して、ぞくぞくと集まった。この様な状況の中、夏の始め、「ヨーロッパ・ピクニック計画」が一部のハンガリー人達によって計画されたのである。

ブダペストの町角や、バラトン湖のほとりには、鉄条網にバラを描いたピクニックへの招きのポスターが貼られた。「政府の畏だ」と怯える人達もいたそうだが、兎も角、一九八九年八月一九日、シヨブロン市郊外のハンガリー・オーストリア国境で、「ピクニック」と名付けた大集会が始まった。

午後三時になると待ち続けた旧東ドイツの数百人が、国境に向かつて走り出し、次々と突破して行った。その時、国境警備隊は銃をかまえていたにも関わらず、発砲が出来ないままだった。

それから直ぐ九月一日には、ハンガリー政府は正式に国境開放を決定し、決定と同時に何万人もの東欧の人達が西欧を目指して国境を渡って行った。そして、この出来事が、その後、ベルリンの崩壊、共産圏崩壊へと繋がって行ったのである。時が流れて、出来事の五年後、私は国境に立っていた。

そこにはピクニックの残骸も無く、東独の人達の影も何も無く、有るのは背丈ほどもある草、草。

「ここにいい園を作ろう」とその時フト思った。ヨーロッパ統一に繋がったこの素晴らしい歴史の事実を風化させてはならないと思った。

いい園を作りたいと言い出したら、秋田から桜の苗木が四〇本届いた。そして井戸が掘られ、水が流れ、ガタガタの道が舗装された。

近くの洞窟で、八月一九日を記念してベートーベンの第九シンフォニーを演奏する事にもした。コンサ

トは日本、ドイツ、ハンガリー、オーストリアの人達に参加してもらった。

一九九七年、第一回のコンサートで二五〇人の声が洞窟に響いた時、私は泣いた。

こんなに素晴らしい「第九」を聴いたのは、生まれて始めての事だった。

これこそ、まさに人間への讃歌なのだと思った。

この素晴らしい気持ちを安城の子供達に伝えたいと思った。上手く歌えなくてもよい。みんなと共にこの小さな町で、数人の人達が勇気を持って行った事が、世界を動かしたという事実を感じて欲しいと私は思っていた。

二〇〇〇年真夏。安城学園吹奏楽部の子供達は、フェイトウーラーコシユの洞窟で人間への讃歌を唄い上げた。

風景を読む

盛田 常夫

ハンガリーのミレニウム行事は、インシュトヴァン国王の王冠移送だった。国立博物館から国会議事堂に移すことにどれほどの意味があるのか。今の時代、王冠で国民の民族主義や団結を煽るというのも時代遅れだし、そもそもあの王冠はオリジナルなものでないから、それを崇拜の対象にしようとするのは、民主主義の為政者がおこなってならないことだとする厳しい批判もあった。一つだけ弁護するとすれば、ミレニウムドームを建設したり、豪華な花火にお金を使わずに、ささやかな出費で千年を祝う行事になったことだけは確かだ。

一月一日の夕刻、国立博物館から

国会へ移送が始まった。これに先だつ午後の国会ではミレニウム特別議会が開かれた。ちょうど午前中にコーシャ・糸見宅を訪問し、この特別議会には議員の家族が招待されていることを知った。もちろん議場にはなく、傍聴席にである。議会終了後、議員たちが王冠の到着を見守るという式次第だった。

不謹慎なことだが、「もしかして」という好奇心が働いた。ひよつとして、この特別議会の議場にも幼児を同伴する議員がいるのではないだろうか、と。子供を預ける所がないと、会社に平気で子供を連れてくる習慣がある。オルバン首相はワールドカップの決勝戦に合わせてシラク大統領を非公式に訪問し、一席しかない貴賓席に長男を連れてサッカーを見せていたことから推察すると、多分、特別国会でも議員の一人二人は子供を議場に入れるのではないだろうか、と。

ユーロスポーツでフランスの選手がシラク大統領から優勝メダルを受け取る背後にオルバン首相がおり、しきりに下を向いて何か話しかけている奇妙な映像が映し出された。息子に話しかけているだろうことが即座に想像されたし、実際そうだった。ハンガリーの多く人も、これに気づいていた。家族を大切にすることがFIDESZの一つの唱い文句だし、オルバン首相は意識的にそれを演出しているが、ワールドカップの一件はどうみても地位の利用としか考えられない。家族を大切にすること、地位を利用して家族に特別な配慮をもらうというは違う。この種の公私混同は、ハンガリーだけでなく、旧社会主義国に普遍的に観察できるのが興味深い。

現在のハンガリーでは地位の利用とか、公私混同という観念が存在しないし、それが犯罪を構成することはない。政治家や官僚の地位を利用した経済犯罪で摘発されたものはこの一〇年間、皆無である。面白いこ

とに、それはハンガリーだけでなく、チエコでもポーランドでもそうだという。市場経済になって、「何でもアリ」になったことが原因だという人がいるが、この説明は間違っている。

こうした社会的慣習や振る舞いは、私の見るところ、旧体制からの遺産だ。旧共産党幹部が自らの子弟の勉強や地位に特別の配慮を払っていたことは良く知られている。社会主義の理念は建前ばかりで、縁故者を優先的に優遇していたことを人々は良く知っている。新しい世代や時代になった今、新しい社会の建設を担う若者は、こうした旧弊を批判し、それを脱却する努力をする道を探るの

だとばかり思っていた。ところが、如何に。子供が親を真似るように、若い世代の FIDESZ は、権力を握ったとたんに、旧体制の政治家と同じ振る舞いをするに何の違和感を感じていないようだ。

政治家や官僚が逮捕されないのは、検察が共産党に従属していた時代の遺産を引きずっているからだ。司法が気概を持って悪に立ち向かうという正義感と独立性が欠如している。

トルジャンが大臣に就いた途端に、高校卒業の息子の嫁を MALEVY の経営委員会に押し込んだことが問題になった。トルジャンは「嫁が大学教育を受けられなかったのは、ボルシエビキでなかったからだ。この任命はそれを補償するものだ」と論陣を張った。結局、分が悪くなり、この任命を取り下げたが、小さな政府組織に親戚縁者をこまめに入れている。これなども典型的な旧体制の行動様式だ。もっとも、トルジャンは

FIDESZ ではなく、最初からそのよ
うな振る舞いをしてもおかしくない
人物だと見られているからまだ良い。
さて、その MALEVY だが、FIDESZ

がこの春に任命した社長が、機体の
トラブルが相次いで夏には辞任する
という一件があった。このヘルナデ
イという青年社長は、ハンガリー最
大の企業 MOL の社長と小さな銀行
の頭取も兼任している。ハンガリー
を代表する会社の三つの社長を兼ね
るといふのは、いくら何でも無責任
ではないか。こういう任命の仕方は、
旧体制の経営者の政治的任命とちっ
とも変わらない。フェリヘジ空港で
旅行者のトランクが開けられる不祥

事が続いている最中、こういう経営体制ではとても改善できないだろうと納得したものだ。幸い、空港従業員で盗みを働く一団が摘発されたので、しばらくは安心できる。

話は戻ってミレニウム国会の議場だが、テレビの中継を見ながら、大統領の演説の内容はそつちのわけで、映し出される議場に目を凝らして見た。やっぱり、いるいる。保育園児を連れた議員が一人いた。ところが、まだいる。私が勘定しただけで、三名の議員が保育園児のような小さな子供を膝に抱え、大統領の演説を聞いている。子供は退屈そうに、机に乗りだしている。ミレニウム国会というのは千年に一回のセレモニーだ。そこに訳の分からない幼児を連れてくるというのは、どういう神経なのだろうか。もつとも、それ以前に、そういう議員に注意する監視はないのだろうか、同僚議員はどうして注意しないのだろうか。それが

不思議でならなかった。こういう大事なセレモニーに幼児を同伴し、議場に入れる国があるだろうか。ロシアでもありえないというと、ロシア人に叱られるだろうか。村の議会ではあるのだろうか。

後日、この話を糸見さんにしたら、ネクタイをせずに、セーター姿の議員もいたという。幼稚園の父兄会とミレニウム国会が同じレベルなのだ。いったいこの国のプロトコルはどうなっているのだろうか、というのが話題になった。

ハンガリーが王国だった時代には、とても考えられなかったことだ。私がか今、分析対象にしているのは、こうした社会的行動のルーズさの背景にある旧体制の社会的規範や倫理である。体制転換の過程で旧体制の社会的規範や倫理がどのように持続し、変容を被っていくのかというのが、テーマだ。

共産党組織の厳格さは良く知られ

ている。そうした厳格さと、このルーズさは似てもつかない。しかし、問題の根源は同じ。ここにある。共産党の厳格さは軍隊を真似たものだ。だから、そこには民主的な合意とか、自発的な規律というものが無い。規範や規律は外から強制されるもので、市民的な自発的規範として育まれたものではない。だから、共産党を一步出れば、生活や仕事の規律は限りなく緩んでいた。市民生活で横の水平的な関係を発展させて、市民的な規範を作り上げるという市民社会を構築する社会的なモーメントが欠落していた。存在していたのは、お上の共産党とどううまくやるかだけだった。

こうした縦社会からは市民の自発的な規範や規律が生まれない。兵役を終えたら、思い切り楽しもうというのが、自然な感覚だろう。まさに旧体制の社会は、共産党を離れた所では、精いっぱい禪（ふんどし）を

緩めるといのが、生活習慣になつた。規律の厳しい共産党組織を一步出た世界に一般的に観察される「ゆるふん」がこれだ。

マトルチ経済大臣が就任して間もないこの春に、長時間話し込む機会があつた。何でも言ってくれというので、まずミレニウム国会のことを話題にした。いったいハンガリー国会のプロトコールはどうなっているのだと。彼も、そういえば、自由民主連合の議員が子供連れで、かつ大統領の演説が始まってから遅れて入場してきたなと気にしている様子ではあつた。

もう少し締めるところはちゃんとしてくれないと、投資家も困るんだという話をした。会社に子供を連れてきては仕事にならないし、他の仕事の邪魔になるだけ。会社に若い女の子がいれば、四六時中、ボーイフレンドから電話あつて、仕事にならない。ヘリアホテルのプールの受付

にいつても、必ずと言ってよいほどの次だ。いったい今の青年はどうなっているだ。そんな暇があるなら、仕事や勉強をもつと真面目にしたらどうか。仕事と私的な生活が分けられないというのは旧体制と同じだと率直に批判的な意見を開陳した。

もつとも、ハンガリー人のルーズさは短所でもあり、長所でもある。アバウトなところは、仕事をやるのに都合が良い場合もある。でも、もう少ししっかりしないと、EU加盟の実体にそぐわないだろう。所得水準が西側に収斂していくだけでなく、社会の基本的な価値観もある程度は収斂させないといけない。こういう社会的規範や倫理、経済的犯罪者を罰する社会的公正観の確立も、ハンガリーにとって大きな課題だ。ポシユタバンク事件や「オイルゲート」のような大事件でも、誰一人逮捕されないというのは、どう考えてもお

かしい。それが社会全体にモラルハザードを蔓延をさせている。

私には、議場への幼児同伴、ワールドカップの見学、経営者の政治的任命、あらゆる経済犯罪の赦免、盗難車の買い戻しなど、一連の社会現象は同じ根から出ていると思えて仕方がない。日本人もあまり大きなことはいえないが、やっぱりハンガリーにはもつとちゃんとしてもらいたい。

会社指導報告より

古河コンポジット・インシュレ
ーター（FCI）の事例

勝岡 宣夫

本企業はハンガリーの国立研究所が所有していた固有技術をベースにしてポリマー碍子を製造する会社として設立されたもので、スタッフの多くは元国立研究所の研究者であり、会社経営の経験が全く無かった。またハンガリーは一九四八年から共産主義国に属しており、一九九〇年やつと資本主義の仲間入りを果たしたがこの時代を経てきた人達が主要なポストについており、今だ共産主義の影響から抜け出せていない。

彼らは自由経済、競争社会、トヨタ方式、ジャストインタイム、などの言葉は単語として知っているがほ

とんど内容は理解していないのが実体である。共産主義の時代には、とにかく職についていれば、その職歴年数に応じて国家が給料を払い年金を支払ってくれていたもので、現在の状況のように、自分の給料を上げるには自分が努力して会社の業績を上げる必要がある事はなかなか理解できないものであった。

端的に言うとな必要な金は日本側が用意すると言う考え方からなかなか抜け出せなかつたのである。

工場運営上の問題点

工場の操業計画や材料の消費見通しが無く、操業予定、原材料の発注時期や発注数量を関係者が集まって決める場当たりのな方法で行われており、これが資金繰りにも悪影響を与えるのみならず、原料不足で工場がとまってしまう事すらあった。

当初の会計システムは単に入金と出金を記帳する大福帳に、税金の申

告に必要な会計処理を加えただけのもので、工場が必要とするいわゆる工場会計システムが全くなく、コスト計算、損益分岐点の推定などの解析に全く使えないものであった。また、棚卸しに対する認識も全く幼稚で殆ど行われていなかった。

コンポジット碍子業界は割合新しい事業分野であるが、FCIは新規参入者であり、今後の成長を目指さなければならぬ。FCIの製品は品質面では優れていて優位であるが、比較的高級な材料を使用する技術であるため競合社との値段の競争では激しいものがある。

従って、大胆なコストダウンを必要としていたが前述の会計システムの欠陥も一因となり、コスト分析から始まる実際のアクションは殆ど行われていなかった。

碍子においては破断してしまう事が致命的であり、長期にわたって所定の強度を保持しなければならぬ。

このためにFRPロッドと端末金具を接続する技術がキーテクノロジの一つである。従来FCIでは端末金具にFRPを挿入し、上下方向から圧縮して固定する方式が取られてきた。

しかしこの方法では圧縮の過程でFRPロッドにせん断力が加わりせん断破壊を引き起こすため、十分な圧縮力を加える事ができず不安定な面があった。また、上記問題のため端末金具やFRPロッドに非常に厳しい寸法制度、材料の厳選を必要とするなど、コスト高となる原因ともなっていた。

これらの問題は上下方向からではなく円周方向から均等に圧縮する事で解決できると見通しをつけ、新しい圧縮方法の開発を行う事とした。

工場運営上の問題に対する指導

工場の操業を効率的かつ確実に行うため操業予定表の導入を指導した。

操業予定表は受注手持ち表、全体製造予定表、原材料消費予定表、各設備予定表、からなり、各表はパソコンによりお互いに連動させている。

受注手持ち表は全ての基本になる表で手持ちの受注を全て書き出し、得意先、製品コード、数量、金額、納期などを入力し、製造番号を振り当てる。これをベースに全体製造予定表を作成する。

全体製造予定表には納期と設備の稼動状況に応じて各工程にどれくらいの製品が流れて行くか記入される。各工程に流れる製品の種類と数量によつて各工程で消費される原材料が計算される。

全体製造予定表で計算された原材料の予定消費量をまとめ、原材料在庫と照合し、過不足を示したものが原材料消費予定表であり、原材料の発注はこの表に基づき行われる。

製造予定は全体製造予定表から各設備の予定表へ転記され、設備の稼

動状況を確認して、各設備への製品の割り当て、段取変えのタイミング、保守保全時期、人員配置、等を決める。

会計システム上の問題に対する指導
初めに毎月末、正確な棚卸しを行うように指導したが、棚卸しが損益計算に直結する重要な仕事であるとの認識が全く無く、棚卸しを単に在庫調査と考えているため、なかなか正確な棚卸しは実行してもらえなかった。

ある時期の決算が非常に悪い原因が棚卸しの誤った数字のせいであることが分かって以来、やっと棚卸しの重要性が認識され、以後担当者を定めるなどして正確な棚卸しが実行されるようになった。会計の問題は現地の税法との関わりがあり、いろいろな改善、変更を行うことは大変困難な問題であった。

また、ハンガリーで国際会計がで

きる人材は破格の給与レベルで外国企業に雇用されており、我々現地企業ではとても雇用できるものではなかった。

結局、現地の株主の主導で新たな会計担当重役を置き、現地親会社が採用しているものと同じ会計システムの導入を行ったが、我々から見るとまだ不十分で種々の解析には使えないものであった。しかし、この過程で入金や出金が一〇〇項目余りの英語の勘定科目に分類できる事がわかり、この勘定科目を我々が通常損益計算書で使用している直接費、間接費、営業外費用などの項目に再分類し、日本で一般的に使われている損益計算書を出力するプログラムを作成した。

内容の理解ができていないのでハンガリー人にプログラムを操作させる事はできないが、彼らのデータを元に日本と同等の損益計算書の発行や種々の解析ができるようになった。

コストダウンに対する指導

コストダウンは大きく分けて原料のコストダウン、工場操業の効率化、間接部門の効率化、とあるが工場操業の効率化や間接部門の効率化は「背景」で述べたように共産主義から脱皮した意識改革が進まなければ本格的な取り組みは困難であり、また人件費の安い当地においては大きな効果が期待できないと判断し、最も効果が大きい原材料のコストダウンに取り組む事とした。

ここで障害になったのは意外にも現地スタッフの品質意識であった。当初、指導内容の一つに品質保証を考えていたが、彼らの品質意識は非常に高く、それほど多くの指導は必要としなかった。むしろ過剰品質を認識させ、コストダウンのために適正な品質を決めて行く指導を行った。彼らの意識の中では品質に対するコストの概念が希薄で、少しでも品質

が落ちる事を嫌がり過剰品質であっても維持しようとする面がある。必要な品質を決めるためにデータを使った論理的に適正水準を求めるところに指導したが、今だにこの傾向は強い。

原材料購入先も従来の国内、近隣諸国だけではなく広く世界に目を向け、可能性のあるところの調査、評価を行うように指導し、さらにこの結果に基づいて現在の取引先を再評価、値段交渉を行うように指導した。

信頼性の向上に対する指導

当初FCIにはあまり多くの品揃えが無く新しい形状の碍子の開発を始めたとした多くの開発が必要であったが、圧縮技術の開発を最優先にし、特に日本側と協力して進めるように指導した。

この技術開発は端末金具の設計、FRPロッドの設計にも影響を及ぼし、コストダウンにも大きく貢献す

るものと考え開発の速度を早めた。
また、材料の硬さの違いによる圧縮効果のばらつきを押さえるため、圧縮に費やされるエネルギーを監視し、この総量を基準に圧縮の制御を行う事を目指した。

工場運営上の成果

操業予定表は始め私が作成し、毎週始めに関係者でミーティングを行い、表に従ったフォローアップ、新しい情報の書き込みを行っていたが、この作業を徐々に現地スタッフの手で行うように指導してきた。

さらに、毎週始めに更新した最新版を関係者に配布する事とし、常に操業状況や受注状況を把握するとともに納期管理にも役立つ工場運営には欠かせないものとなった。現在は一〇〇%現地スタッフの手で作られ毎週最新版が発行される。

これに基づき原料が発注されるので適正な原材料ストックができるよ

うになり、年間一〜二回発生していた資金繰りのトラブルや原料不足による工場の休止は全く無くなった。また、工場には毎日の予定と出来高を比較する白版を設置した。日々これをチェックする事でトラブルの有無など工場の状態がつかめるようになった。

会計システム上の成果

残念ながら現地スタッフだけでは日本で使われているような損益計算書の作成や、いろいろな解析を行うことはできないが、ソースとなるデータ作りはできるようになった。

我々が行っている活動の成果を評価する上で会計的な分析は欠かせないものであり、分析した結果をグラフなどで示すと理解はしているらしいが、このような会計システムや分析は共産主義的な発想からは最も遠いところに存在するもので、この導入には世代交代を含めた時間が必要で

ある。

現在のところハンガリーの法律で定められた会計報告書は現地スタッフが作成し、コストや活動の評価に必要な会計分析は私が行っており、残念ながら現地人への引継ぎはできていない。

コストダウンの成果

実際にコストダウンに取り組む前に、実際のコストを把握する事が重要であった。

と言うのも誰もコスト計算ができなかったのである。初めコスト計算テーブルを作成し、コスト構成項目を積算する方法を指導した。

その後、表計算ソフトを使用し、データベース部分とコスト計算部分から成るコスト計算プログラムを作成して現地人のパソコンに移植し、現地スタッフが使えるようにした。データベース部分には原材料の単価、碍子種類毎の材料使用量の計算式、

ロス率、貨幣交換比率、などを入力しておく。これらのデータは常に最新値を入力しておく事でいつでも最新のコスト計算ができる。

特に貨幣交換比率はハンガリーのようにインフレの大きな国では重要なファクターとなっている。これにより各要素のコストに占める割合がわかり、何に力を入れてコストダウンを行うべきかが判断できる。また、コストが把握できる事により適正な売値も決定できるようになった。

実際のコストダウンの手順としては、始めにコストダウンを行うモデルケースを決め、このモデルに集中してコストダウンを行い成果が出たら、次にこのモデルと同様なコストダウンを各製品に横展開する事とした。

始めに行った事は各原材料の情報収集であり、特に日本側でつかんでいる情報を流してもらい、我々の購入しているレベルの相対評価を行う

とともに安価な材料を供給してもらえそうなメーカーへコンタクトを開始した。

さらにサンプルを入手してFCIの製造プロセスに適合するかどうかの評価を行いながら、安価な材料に切り替えることを行ってきた。中でも次項の「信頼性の向上」とも関係する端末金具の材料変更は大きな改善であった。

端末金具

従来、端末金具は圧縮によってFRPロッドと固定される点から、鍛造品で作られていた。これを可鍛鉄に置き換えることにより購入範囲が広がり、特に**から安価な金具が購入できる事がわかった。当初、鑄造品を圧縮するアイディアはハンガリー人スタッフには無く、強い反対を受けたが、実際にサンプルを発注して試験を行い非常に良好な結果を得たことから現地スタッフ

の理解も得られ可鍛鉄品の導入に成功した。

FRPロッド

FRPロッドの情報も**製のFRPが大幅に安い事を突き止め、これがFCIで使用可能か調査するとともに、従来のFRPロッドメーカーと共同で**の変更を行うことにより、大幅なコストダウンが可能となった。

シリコンゴム

原料費の半分を占めるシリコンゴムは代わりに使える材料も見つからず苦戦している。それでも粘り強い交渉で**の値引きを引き出した。指導の効果を売上に占める原材料費と比較すると指導前の一九九七年には売上に占める原材料費の割合が*%、一九九八年には同比率が*%となり、一九九九年上半期は同比率*%となった。

この原材料費の中のシリコン、FRP ロッド、端末金具に限って試算すると*%のコストダウンを達成した。実際の損益では指導前の一九九七年は**の総売上に対し**の赤字、その後徐々に指導の効果が現れ一九九八年は**の総売上に対し**の黒字となった。

なお、一九九九年の予算は総売上*
* 経常利益* * であるのに対し、半期の一月から六月の段階で売上は*
* とほぼ予算通りだが利益は* * とすでに年間予算を上回っている。
分析の結果予算を上回った分はコストダウンの成果であることがわかっている。

信頼性の向上の成果

端末金具とFRP ロッドを固定する技術開発は最終段階に入っている。大きな変更点は、圧縮方向を上下方向から向心方向へ変え、圧縮の断面も六角形から八角形に変えた事であ

り、さらに圧縮量の制御を従来の変位制御から消費エネルギー制御に変えた事である。本変更により端末金具とFRP ロッドの接続強度はFRP ロッドの破壊値とほぼ同一となるまで向上させることができた。

この事により同じ加重を保証する碍子でも従来のものより細いFRP の適用が可能になるなど設計面に大きな改善効果をもたらした。また、エネルギーコントロールを行う事により、材料の硬さの違い、寸法誤差などを吸収する事ができることから、材料を厳選する必要が無い、寸法制度を荒く出きるなどコストダウンにおいても大きな効果を発揮した。

今後の問題点・課題

FCIは元研究者でさらに共産時代の考え方が染み込んだ世代が中心となっている会社である。彼らは自由競争の中で生き残れる会社にしようとして大変な努力を重ねてきた。しか

しながら底辺に流れる思考、文化にはやはり異質なものがあり、これが日本的な手法を導入しようとする時の障害になることが多々ある。

始めに、ここに住む日本人の共通した認識としてハンガリー人は非常に言い訳が多いと言う事である。例えば、彼らの仕事は細かく完全に分業化されていて、自分の仕事以外は全く関知しない。この事は一つの仕事を責任持って最後までやる事を非常にやりにくくしており、何か問題が起こると、自分の言い訳を一生懸命考えて全体の事を見ようとしないう事に結びつく。関係ない事まで引き合いに出して延々と言い訳をして、とにかく自分の立場を守る事に終始し、反省しようとしなない。

これも失敗すると責任をとらされる共産時代の悪癖なのかと気の毒に思うが、反省しない事は重大な欠陥で次の改善のステップつながらないないのである。

次にホワイトカラーとブルーカラーの格差が挙げられる。階級社会の名残かホワイトカラーとブルーカラーでははつきりカテゴリーが違っていると認識されており、仕事はすべてトップダウンで作業者から意見を吸い上げるような考え方が無いのである。

三番目に、会計システムの不備が挙げられる。本報告で述べているようにハンガリーの従来の会計システムでは必要な分析ができない。外国企業の進出に伴ない国際的な経理ができる人材が必要となっているが、従来のハンガリーの会計士では対応できず、特別な訓練を受けた人材が非常な高給で外国企業の経理に当たっている。

高給、人材不足は依然続いておりこのような状況では地元の企業で国際経理ができる会計士を雇う事は到底できない事である。

FCIの場合、一部の企業に見られるように設立当初からハンガリー

の会社と全く違う日本の会社を目指しているのではなく、日本人が手助けするハンガリー人企業として運営してきているので、このような社会的背景に影響されるのはやむを得ないことである。これらの問題は時間をかけて解決しなければならぬ。

感想

ハンガリー人は総じて勤勉で頭も良いと思われ、言われたことはまじめにしつかりやるが、問題点を見つけて解決していく能力、訓練が不足している。

この点を補い、会社として独り立ちできるように指導を行ってきたつもりであり、概ね現地の人たちにも受け入れられ、効果をあげ、そして会社も黒字転換を果たした。

今後さらに拡大して行かねばならないが、これからは工場の合理化を始めとして、基本的に個人主義で、

既得権を奪われるような変更には応じようとしない、また合理化や改善に対する知識が未熟なハンガリー人にとっては理解し難く、不得意な分野の改善が要求されてくる。

性急な日本の手法の導入は受け入れてもらえないものの利益を追求する姿勢には厳しいものがあり、特にオーナーの期待に応えられない経営者はすぐ首にする欧米式のやり方を主流としてハンガリーの会社も変わりつつある。

飴と鞭の欧米式と改善やサークル活動に代表される日本式をうまくとり入れてもらい今後さらに大きく発展して欲しいと願っている。

作文

八〇〇メートルは、つらかった

六年 小野田 優

「位置について、よいドン」。

ピストルの音が鳴り、八〇〇メートルが始まった。ぼくは、思いつきり走り出した。

「八〇〇メートルだから、ゆっくり走っていいこうと思つて走つてた。でも、みんなすごく速い。なんでこんなに速いんだろう」と思つた。

それで、みんなについていくように走つた。一周目の最後の方にわき腹が痛くなつてきた。二周目に入る時、みんなが、「がんばれ」と、言つてくれた。

ぼくは、あきらめずに走つた。2周目に入ってしばらくすると、盛田

校長先生がもうゴールした。

「何て、速いんだ」と、思わず言つてしまった。そして、最後まで走り通した。結果は二五位だったけれども、いい経験ができた。ただ、走り終わつてからは、歩けないほど疲れた。

おもしろかった競技は、マイムマイムだ。途中で、少しいたずらをした。中心に向かつて進むとき、友達と止まつて、みんながバランスをくずした。

みんな仲良く競技ができた。

嫌な運動会

六年 手島 慎平

「わーい、今日は運動会だ」。

僕が一番嫌な競技は、フンガロリングだ。

「よいい、ドン」。

フンガロリングがスタートした。何て恥ずかしい競技なんだろう。だんだん僕の番が近づく……。

もう一つ嫌いな競技は、混合リレーだ。リレーAでは第一走者なので、ものすごく緊張した。結果は……。

ム力つくパン食い競走

六年 大田 寛朗

「よーい、ドン」。

僕は必死に走り出した。パンのある所までは良かった。しかし、僕の前にはパンが無い。

「ええっ！」。

僕は考えた。他のコースのパンに食いつくことにした。だが、パンの位置がだんだん上がっていく。

「届かない」。

やっとの思いで、パンをくわえて全力疾走した。でも、五位だった。

「でも、どうなってんだー」。

パン食い競走

六年 近藤 麻美

「パン、きちんと取れるといいね」。

「そーだね。去年なんか、なかなか取れなくて、ビリになっちゃったんだもんね」。

「私もそーだった」と、言いながら

パン食い競走の順番を待っていました。ついに順番が来たとき、隣には、てっちいー、アダム、有希子ちゃんと芳子ちゃんがいました。

「よーい、ドン」。

みんなが、いつせいに走り出しました。私は心の中で、

「パンが、きちんと取れたらいいな」と思いながら、パンを思いつき引っ張りました。私は、一番最初にパンを取って走っていきましたが、後ろから、てっちいーがものすごいスピードで追いかけてきました。

ゴール前で追い越され、五〇セ

ンチぐらいの差で、二位になってしまいました。とても、くやしかったです。

二人三脚

六年 藤谷 有希子

「もし一緒になったら、私は左で、右は、．．」と、めていたことが役に立ちました。

白線の後ろに立って、ドキドキしながらピストルの音を待っていました。

「パーン！」。

みんないつせいに走り出しました。封筒の中身を取り出すと、紫色でした。隣にいた芳子ちゃんが、

「紫の人誰？」と、大声で叫んでいました。私は隣の人と一緒になれるはずがないと思いこんでいたので、自分の色を青だと勘違いしてしまい

ました。

しかし、青の人はいなくて、隣の
芳子ちゃんと一緒だったのです。

ひもを結ぶのに手間取り、出遅れ
てしまいました。走る前にいろい
ろと決めていたので、快調に息を合
わせて、走ることができました。

「だめだ、三位だ！」と、思いまし
た。しかし、何とゴール直前で一組
を追い越しました。二位になること
ができたのです。一位が良かったけ
れど、二位もとても嬉しかったです。
誰がひもを結ぶのかも決めておけば、
良かったと思いました。

綱引き

六年 横山 知沙

プログラムの最後の方に綱引きが
ありました。私は今年も赤組でした。
競技開始前、何か知らないけれど、
みんな綱を持ったり、下ろしたり、
引つ張ったり。

最初は何をすればいいのか、分か
らなかつたけれど、先生が、大声で、
「綱は、よーい、ドンの合図で持つ
てください」と、言ったので、意味
が分かりました。

綱引きは、赤組の圧勝でした。

家に帰ると、妹が「お姉ちゃんの
組、強すぎる」と、言い出した。私
は筋肉痛でしかも、妹のぐちを聞か
され最悪でした。

運動会の後は、さすがにつかれま
した。

二 世紀を創ったハンガ

リー人列伝(その三)

ノイマン・ヤーノシュ

(ジョン・フォン・ノイマン)

マルクス・ゾルジュ著

盛田 常夫編集・訳

生い立ち

「ジョニーが生まれた一九〇三年、興隆するブダペストは、イタリア・ルネサンスの都市国家以来、再び一つの小さな共同体から、科学者、作家、芸術家、音楽家、億万長者のきらめき輝くような一代を世に生みだした。一八六七―一九一三年の間、ブダペストはヨー

ロッパのどこよりも目覚ましい経済的な発展を達成し、一時的にせよ、自立した富豪階級(自問する民主主義ではなく)を形成した」、*The Economist*誌の元編集長ノイマン・マクラエは熱っぽく語る。「ブダペストは音楽とオペレッタの波に乗り、蒼きドニユープを下って二世紀に波乗りして行った。工業化してなお 春のスミレの臭いを漂わせる この興隆する都市の六 を超えるカフェと光彩を放つエリート学校が、精神的活力の鼓動を伝えていた。この世代にどうして天才が集まっているのかと質問されたノーベル賞受賞者ユージン・ヴィグナーは、その質問を理解できないと答えた。この時代にハンガリーが生み出した天才は、ジョニー・フォン・ノイマンただ一人だというのだ」。ジョージ・クラインもこれに同意する。「ジョン・フォン・ノイマンこそ、

この時代の世界でもっともスマートな人間だった」、と。

マルクス・ノイマンはこうした時代の集合の一部であった。銀行家として、工業化・商業化するこの国と為政者に仕えることで、一九一三年に爵位を獲得することになった。こうして、ノイマン家はその名前に貴族の称号を付し、フォン・ノイマンと名乗ることになった。

ヤンチイ(ヤーノシュのニックネーム)は頭を使うのを楽しんだ。八桁の暗算ができた。ある日、母親がぼんやりしていると、ヤンチイは「お母さん、何を計算しているの」と尋ねたという。夕食時に父親は時折、古典ギリシア語でヤンチイと会話した。父は自分が通った学校、ルーテル高校へ息子を通わせた。ユージン・ヴィグナーもまた同じ学校に通い、卒業から一〇年以上の歳月を経たアメリカ

でも、ハンガリー語の手紙でジョークをやり取りする仲だった。ヴィグナーはよく、ノイマンの性格を伝える逸話を想い出す。

「自転車に乗る二人の少年が四キロ離れた所から、時速二キロの速度で、互いに出会うように出発する。同時に、一人の少年の鼻から一匹の蠅が、もう一人の少年の鼻に向かって時速三キロで出発する。蠅は他方の少年の鼻に到着すると、すぐに折り返し、二人の少年の間を往復する。そこで、問題は、この蠅が飛行する距離は合計でどれほどになるかだ。これは学生コンテストのよく知られた課題だった。少年たちは一時間後に出会い、この一時間に蠅は三キロ飛ぶという自明な物理学的な解答がでる。私がこれをジョニーに質問した時のことだ。彼は数秒躊躇ってみせて、それから三キロと答えた。なあんだ、君はもうこのトリックを知っていたのかと

言うと、ジョニーは驚いて、え、トリックって。僕はただ無限級数を計算しただけだよ」と言ったのだ」。

伝説的な数学教師ラーズロー・ラーツはジョニーの才能に気づいていた。彼はマックス・フォン・ノイマンを訪ねヤンチイの数学教育に特別配慮すべきだと説いた。マックスはもちろぬお金に不自由していた訳ではないが、ラーツは特別な報酬を要求することはなかった。マックスの許可を得て、ラーツは大学教授に相談を持ちかけ、ヨーゼフ・キュルシャーク教授はガール・セグー（エトヴォシユコンテストの優勝者）にヤンチイの面倒を見るように指示した。こうして、ジョン・フォン・ノイマンは一八歳にも満たない高校生時代に、最初の数学論文を発表することになった。

当時、ハンガリーの数学界には二人の輝くスターがいた。ともに一

八八年に数週間の違いで生まれている。その一人はフリジエシユ・リース（一八八一年・一九五六年）。ハンガリー南部のセゲド大学教授で、現代関数解析の創始者の一人。その著書は中国語、英語、フランス語、ドイツ語、日本語、ロシア語に翻訳されている。彼の弟マーセル・リース（一九八六―一九六七年）はスウェーデンのルンドで数学教授になっている。

もう一人のスターは、複素解析を専門とするリポー・フェイエル（一八八一年・一九五九年）で、フリーエ級数の総和定理でその名が知られている。一九〇五年にポアンカレがハンガリー科学アカデミーの第一回ポヤイ賞（当時の数学分野における最高の賞で、ノーベル賞に代わるものとしてハンガリーが授与していた）の授賞式にブダペストを訪問した時のことだ。彼が列車から降りた途端、迎えの文

化大臣に、「フェイエルはどこにいますか」と尋ねた。大臣は次官を見て、「いったいフェイエルって誰」と聞いたのだ。大臣は二五歳の若者を知らなかったのだが、ポアンカレは「世界で最高の数学者の一人ですよ」と教えた。ローランド・エトヴォシユはフェイエルをブダペスト大学教授に任命し、そのフェイエルがポール・エルドシュ、ジョン・フォン・ノイマン、ジョージ・ポイヤ、ガールボル・セグーなどの才能を開花させたのである。フェイエル教授は一代のノイマンを「ハンガリーで最高のヤンチイ」と呼んでいた。

後に、ガールボル・セグー（一八八七―一九八六年）とジョージ・ポイヤ（一八九五―一九八六年）はスタンフォード大学教授になった。セグーの姻戚関係にあるピーター・ポイヤは、こう言っている。「数学者になるのにハンガリー人である必

要はないが、それで助かることもある。スタンフォードでセグーは私に、「一代のノイマンに与えた課題と、マックス・ノイマン銀行の便箋に書かれた彼の回答を見せてくれた。後にセグーはこの便箋をブダペストに送っている。一九五〇年代、ポイヤとセグーは、エトヴォシユ・コンテストを真似て、カリフォルニアで学生コンテストを主催することになった」。

マクラエによれば、彼等の教育精神が、一九六〇年代と一九七〇年代のシリコン・バレーの奇跡に貢献していると言う。テオドル・フォン・カールマンはまた、こう回想している。

「私がアーヘンに来て最初の年のある日、ブダペストの銀行家が七歳のジョニイを連れてやってきた。息子が数学者になりたいたいのを説得して止めさせてくれなしかと言うのだ。彼は、数学で

は飯が食えないから」と言う。その少年と話した。何とも凄い少年だった。一七歳で彼はもう無限についての自分の概念を彫琢するといふ域に達していた。この問題は抽象数学のもっとも深い問題の一つで、彼は非常に面白い理論を展開していた。彼の生来の才能を曲げるように説得するのは、恥ずかしいことだと思った。他方で、私の父がやはり私を数学から遠ざけようとした青年時代のことや頭をよぎった。そのことで私が苦しんだことはなかったし、それで数学の勉強が妨げられたこともなかった。そこで、ジョニーの件では、父が息子と妥協し、ジョニーが化学工学を勉強するようにしたらどうかと提案した」。

そこから、ノイマンの面白い生活が始まった。ブダペスト大学では数学科の学生として登録されていたが、ほとんどの時間をチュー

リッヒにある連邦工業大学 (Eidgenössische Technische Hochschule) で化学を勉強した(一九二一―一九二五年)。学期の終わりになるとブダペストに戻り、ブダペスト大学の期末試験を受けた。彼はまた、ベurlinにもよく行き、そこでアイnシュタインの物理学セミナーにも出席していた。化学工学の学士はチューリッヒで、数学の博士号はブダペスト大学で同時に取得した。博士論文は一九世紀にいわば直感的な発展を見せた集合論に、公理的基礎を構築しようとするものだった(一九二六年)。それから、彼はゲティンゲンに向かい、ヒルベルトの助手になった。

数学と物理学

ゲイデルが公理体系における解決不能な問題を証明してから、数学の厳密性にたいするノイマンの見方が変化した。その時のことを、

「エデンの園から追放されたようなもの」と語っている。これ以来、ゲイデルを偉大な思想家の一人として見なすようになった。非数学者の目には二世紀で最高の数学者と見えるノイマンが辿った初期の出来事だった。コルネリウス・ランツオシュは、「ジョン・フォン・ノイマンはもつとも優れた数学者の一人ではなく、二〇世紀のもつとも優れた数学者である」と言う。

一九二〇年代のゲティンゲンでは興味深い発展が見られた。隣のマックス・ボルの物理学部にはボア、フェルミ、ハイゼンベルグ、オツペンハイマー、パウリ、シュレディンガー、テラー、そしてヴィグナーが机を並べており、量子力学の統計的な解釈が生まれている。ハイゼンベルグは無次元元の列ベクトルを使って原子スペクトル解明したが、それは観察さ

れる双極モーメントをそれぞれのスペクトル線に対応させるものだった。シュレディンガーは弾性的な電磁場の振動から放射される光線を記述した。彼はハイゼンベルグの抽象代数が嫌いで、逆にハイゼンベルグは彼の電子ゼリーなど魅力に乏しいと考えていたが、双方の理論は同じ結果を与えたのである。そこで、ヒルベルトはノイマンにこの問題を整理するように求め、二六歳のノイマンはすぐに証明ノートを作り、ヒルベルトに渡した。「ハイゼンベルグの列ベクトルもシュレディンガーの波動関数も、無限次元のヒルベルト空間におけるベクトルを表している」と。

後にノイマンは、有界の作用素の固有関数だけでなく、有界でない作用素の固有関数も、ヒルベルト空間における基底ベクトルの完備集合を作ることを証明している。

ほとんどの物理量は有界でない作用素によつて表されるので、この証明は重要であつた。これは、いかなる量子力学状態もこれらの基底ベクトルの一次結合によつて表されることを意味している。それらの係数の絶対平方は、実行された測定の異なる諸結果にたいする確率と解釈することができ。これによつて、アインシュタインとシュレディンガーが嫌つたボーアの「波動関数の確率解釈」に数学的な基礎が与えられた。この見解は今では広く受け入れられており、ボーアはこの業績で一九五四年にノーベル賞を受賞した。

「このようにして、ユークリッドが幾何学におこなつたように、ノイマンは数学者に受け入れられるような形式を、量子力学に与えたのだ」。かくして、数学と物理学の建設的な共存の時代が始まつたのである。ノイマンによる「量

子力学の数学的基礎」は新しい物理学の古典的なテキストになつた。もう一つのノイマンの成果は、擬エルゴード定理の精確な証明で、これが統計物理学の基礎を築いた。これは、動的システムをその運動の間、位相空間のほとんどあらゆる所で見つけることができることを意味している。ノイマンはこの古典力学の問題を三次元空間（あるいは六次元位相空間）の分析課題としてではなく、関数空間における作用素処理の課題として捉えたのである。

後に自らの履歴書のなかで、ノイマンはこれらの二つの成果を主要な科学業績として位置づけている。今日では、それらが量子物理学と統計物理学に、数学的に厳密な基礎を与えている。しかし、「数学にノーベル賞はない。恐らく、ノーベルは数学者と駆け落ちした女房を許すことができなかつたか

らだろう」。

テラーはノイマンの才能を冗談めかしてこう描く。

- 一． ジョニイはあらゆる命題を証明できる。
- 二． ジョニイが証明するものはすべて正しい。

「もし誰かが問題を与え、フォーン・ノイマンがすぐに解答を与えなかつたら、それは解答不能な問題なのだ」。人類は数学の王国の外に利益をもたらしたノイマンの業績を知っているし、感謝している。「彼は多面的な天才だつた」。エトヴォシユ協会がノイマンを名誉会員に選んだ時、数学と物理学の双方の業績を讃えた（一九四一年）。彼もまた、履歴書のなかで、自らを数学者および数学的物理学者と見なしていた（後にアメリカで、ノイマンはアメリカ数学会とアメリカ物理学会の両方の会員になつた）。

プリンストン時代

ドイツの政治環境の変化が身近に感じられるようになり、ノイマンはプリンストン大学からの招聘を受け入れ、アメリカに渡った（一九三三年）。彼にとつて、アメリカ人の単刀直入的な実用主義は魅力だった。アインシュタイン、ヴィグナー、バルトックがアメリカにたいし留保の姿勢をとつたが、ノイマンはアメリカに一目惚れした。そのアメリカでノイマン・ヤンチイは、ジヨニイになった。ヨーロッパを離れる直前、彼はハンガリーに戻つてマリエッタ・クヴェシユと結婚して、結婚に伴つてカトリックの洗礼を受けた。

プリンストンではジヨニイが新設された高等研究所の最年少の教授で、すぐに研究所を代表する人物の一人になった。ヨーロッパ風のカフェやセミナーなどのくつろいだ雰囲気渴望したノイマンは、

定期的にパーティを開いた。社交的なものだけでなく、集中セミナーのようなものも開いた。学生や実験室のない研究所は、ノイマンにとつて、少し不毛に感じられた。異星人的な学際精神で、彼はこう言っている。「人類の関心は変わるものです。科学の現在の興味が消滅し、まったく違った事柄が未来の人類の心を占めるようになるでしょう」と。

一九三七年、ノイマンはアメリカの市民権を獲得した。善良なアメリカ人と同様に、彼もまたポーカーと自動車運転を習つた（実際には、ポーカーでも運転でも、とても上手とは言えなかった。それは彼の関心がそこにはなかったからだろう）。ロス・アラモスでは、メトロポリス、ノイマン、テラー、ユーラムのポーカー・パーティは良く知られていた。ノイマンはポーカーの数学理論にかんする論文

を発表しており、そこからゲームの理論が発展した。彼がアメリカ軍の予備役の将校になつてから、弾道ミサイルや衝撃波などの卓越した専門家になつたが、それが後にコンピュータへと導くことになる。

軍事実験基地はアーバーデーンにあった。そこにはテオドル・フォン・カールマーンが建設した超音速風洞実験装置があつた（一九三七年）。彼は流体力学や乱流に関心があり、それが音速飛行へ適用された。しかし、流体力学の方程式は高度に非線型で、それを解くには通常の数学分析のパワーでは不十分だった。その年、カールマーンはノイマンに非常勤で助言してくれるように頼んだ。ジヨニイは現実が求めている新しい挑戦を感じ取り、情熱を持って仕事し始めた。彼は砲弾表を手直しし、爆発と衝撃波の伝達を研究し

た。そこから、ノイマンはパンチ・カードで操作される速い計算機に興味を持つようになり、それでIBMと長期にわたる関係ができた。「ノイマンはロス・アルモスで爆破計算も行っている。私の仕事は、細かな力仕事の計算を引き受けることで、ノイマンを手助けすることだった。彼はオフィスに座ったまま、声をだして考え始めるのだ。私はそれを走り書きし、その詳細を再計算する。後で、彼は私が書いたものを読んで、私を共同著作者にするという寛容さがあった」。

「第二次世界大戦も終わる頃、私はノイマンと水中爆発の仕事を一緒にしていた。敵の港でどのような仕掛けが可能かというのが、課題だった。一つのアイディアは、水中爆発によって巨大な波（たとえば津波のような）を起こし、船舶を破壊するというものであった。後のビキニ環礁の実験は、波を起

こす研究実験を可能にしてくれた。波の高さと距離の関係にかんする我々の計算が、驚くほど当たっていることが判明した。もう一つのオプションは、深海で核爆発を起こして、潜水艦を潰すというものだった。ノイマンと私の計算では、七メートルの深さがもつとも強い衝撃を与えることが分かった。一九五一年、そのようなテストが、サン・ディエゴの海岸から七キロ離れた太平洋で、我々が推奨した深さで行われた。この実験は「The PROJECT WIGWAM」（インディアン小屋）と呼ばれた。海に金属の樽が並べられ、それが爆発で圧縮された。その潰れた樽のニツクネームは、「squaws」（インディアン妻）だった」。

戦後、英国テレビのパーソナリティになったヤコブ・プロノフスキーは、戦時中、爆撃パターンの仕事をしていた。ノイマンに助言

を求めた時だ。彼にこう言った。「駄目駄目、あなたは分かっている。あなたのように三次元空間で視覚的に見てはいけないの。こう考えて見て。この爆発の写真で起きていることは、第一次微分係数がまったく消滅してしまっているから、目に見えているものは第二次微分係数の痕跡なの」。

エドワード・テラーは、「ジョニーは私の三歳の息子と、子供語で話すことができた。こういうことを何度か経験して、こう考えるようになった。もしかして、我々と話す時も、同じような方法でやっているのだろうかと」。

「私はノイマンの偉大さを学生に説明しようとした」と、ピーター・ラツクスは言う。「彼が夏休みにロス・アンジェルズに来るといので、戦後になっても、人々は皆彼の到来を、首を長くして待っていた。数学者だけでなく、物

理学者もだ。誰もが彼と話しをしたがり、彼に新しい問題や成果を伝えようと必死になったものだ。彼の話すことに、誰もが注意を払っていた。今日、物理学者が興味を持つような数学者はどこにもいない。

平和と軍備

平時になって、ノイマンは原子力の解放によって得られる技術革命が、これまでの人類史のいかなる発見よりも人間社会に深い変化を惹き起こすことになる、強く信じていた。そして、数十年後には、この新しい錬金術が使用量測定メータを必要としない空気と同じように、人類に無料の新しいエネルギーをもたらさだろうと考えていた。ノイマンは核エネルギーが絶対に安全だと主張していた訳ではないが、自動車が背負っているリスクと同程度のリスクなら受

け入れ可能だと考えていた。

平和そのものもけっして十分に安全ではなかった。冷戦による軍備競争が始まっていた。ノイマンは原爆の改良に携わり、一九四六年の南太平洋の実験にも参加している。核爆弾の計算はノイマンではなく、コンピュータが行った。テラーとユージンによって開発された水爆点火でも、ノイマンの技術が不可欠なものであることが分かった。核融合爆発を追跡するために、数十億回の乗算が要求される。この計算の実行には、人類がこれまでやってきたすべての計算の総計よりも、多くの計算ステップが必要とされると、ノイマンは予測していた。しかし、後になって、世界中の子供たちが行っている乗算の方が、我々の問題の計算よりはるかに多いことが分かった。

アイゼンハワー元帥が大統領に

選出されたときに、カールマーソンの推薦で、ノイマンはワシントンもつとも影響力のある科学者になった。原子力エネルギー委員会はわずか五名のメンバーから成っていたが、ノイマンがその一人だった（一九五四年）。いわばゲームの理論の応用として、ノイマンは核抑止力政策を考案した。

過去において、軍備システムが導入された時には、対抗措置が開発されるまで、非常に有効に機能した。このゲームでは常に最後に動いたものが、以後の一定期間に優位性を保つ。原子力武装の難しさは、数週間以内に戦争の決定ができるという点にある。これは武器システムの高度な差別化を要請する。システム分析やオペレーション分析の高度に特殊な手法が、成果を生むことになる。このことは、人知の限りを尽くした柔軟性のある、最強の武器の重要性に

目を向けさせることになる。」。

テオドル・フォン・カールマンのお陰で、アメリカ空軍は優位性を保っていたから、抑止政策は簡単だった。もし敵が挑発すれば、核攻撃の最初の数時間で全滅させられることが明らかだったからである。それ大陸間弾道弾の開発を決定した理由はここにあり、フルシチョフのもとで、一時的な優位性を確保した（一九五七―一九五九年のスプートニク時代）。このことを持つ意味を素早く感じ取ったカールマンとノイマンはミサイル戦略の開発を促したのである。

ノイマン型コンピュータ

非線型の衝撃波を計算するために、ノイマンにはコンピュータが必要だった。ロス・アルモスでは電気機械式のパンチ・カード型IBM 計算機だけが使用可能で、元を辿れば、これは一八九九年の国勢

調査のために開発されたものだった。ちなみに、一桁の乗算を手計算でやれば五分ほどかかるが、この計算機では一五秒ほどでできた。これで内発の計算をやると、非線形の編微分方程式なので、数週間かかることになる。機械的リレーの特性から計算速度が遅いのである。

コンピュータ史上、歴史的な転換が一九四四年八月七日に起きた。その日、ノイマンはフィアデルフィアの ENIAC (Electric Numerical Integrator and Computer) を訪れた。ここでは、真空管の中で摩擦のない電子の動作を開発していた。人間の頭脳を真似た一万七千個の電子管をもつ ENIAC に感動したノイマンは、これをアバーディンの軍事基地に移し、水爆の点火計算に利用することにした。

新しい微分計算をする場合、ENIAC の配線を変えるのに一五分かかり、計算時間は三秒であった。

実際の計算から言えば、この機械ははなはだ効率が悪かった。そこでノイマンにこの問題を解決するアイディアが浮かんだ（一九四四年八月末）。コンピュータに初期データを入れるだけでなく、プログラムも電子的にインプットして、内蔵するというアイディアだった。つまり、中央演算ユニットが内蔵されたプログラムに従って、徐々に操作を実行するのである。これが現在もなお世界で利用されているノイマン型コンピュータへと発展した。

世界大戦が始まる直前の一九三八年、ノイマンはブダペストに戻って、二番目の夫人となるクララ・ダンと再婚した。後に、彼女は最初の電子計算機コード記述者の一人になった。この時はまだ、アルファベットと数字しか利用できなかったもので、彼女は「E2A BIDES 10」（ハンガリー語の「EZA

BIDES LO"に、「これは臭い (hidōs) 馬だ」を意味する) をエラー・メッセージとして使った。

これまで、量子力学、情報通信やその他の目覚ましい進歩が見られる領域で、線型方程式が支配的だった。ノイマンはこう言い放った。

「これからは、完全に新しい基準が適用されることになる。数学的に単純かそれとも複雑か、エレガントかそれとも不恰好かだ」。ノイマンはコンピュータが予測科学に新しい時代、過去と質的に異なる新時代を到来させると考えた。

非線型の衝撃波の問題を処理した後、ノイマンの関心は気象予測の信頼性の向上に向けられた。彼の目標は、気象学を熟練の経験予想から予測科学へ転換させることだった。そのため、電子計算機を利用したのだが、当時のコンピュータでは翌日の気象予測するのに二日もかかった。現代の戦争では

気象予測が戦略的な重要性をもっている。アメリカ空軍はノイマンの仕事を全面的にサポートした。コンピュータ化された軍事用の気象予測は一九五五年に始まった。

「地球大気の流れ方程式で表現される想像を絶するような数学問題が、ノイマンを魅了した。生来の科学的関心と問題解決によってもたらされる莫大な技術的利益が、ノイマンがこの問題に心を動かした理由である。大気の力学で得られた知識とコンピュータを使えば、天候の予測だけでなく、天候の管理や変更も可能になるかも知れない。ノイマンは利用可能な原子力エネルギーを使って、大気のグローバルな循環の変化を惹き起こせる時代が来ると予想していた。現象の物理がほぼ解明されている問題領域では、将来の数学的分析の発展が、人類による自然管理を大

きく広げることになる」。

しかし、我々はまだ目標に到達した訳ではない。ジョーニイの死後、気象学において、古典的な非線型力学システムにおける決定論的力学が発見され、信頼性のある長期の気象予測が行き詰まった。しかし、ジョーニイのアイデアはこれまでにも増して、重要になってきている。CO₂排出増加の温室効果による地球温暖化は、すでにノイマンによって予測されていた。まさに我々の時代の巨大なコンピュータが二一世紀の気象モデルの予測に使われている。このことが、化石燃料を使うべきか、核燃料を使うべきかの人類のジレンマを再考させる契機になるかもしれない。

「我々は技術を延命させることができるだろうか」は、彼のエッセイのテーマの一つであった。限りなく加速される技術進歩と生活スタイルの変化が、ユーラムとの

議論の中心テーマであった。この
永続する技術進歩が、「それを超
えてはもう今までの人類の生活が
続けられないような、人類史にお
けるある本質的な特異性が忍び寄
っている」という外観を与えてい
る」。

コンピュータと頭脳

「コンピュータと頭脳」はノイ
マンの最後の著作となった。オー
トマタにかんする彼のアイディア
の源泉は、一九三八年まで遡ること
ができる。ノイマンが祖国から政
治的に切り離された後に、頻繁な
通信を通して彼に異星人的なアイ
ディアを供給したのは、ブダペ
スト大学の理論物理学教授のルド
ルフ・オルトヴァイだった。彼は
ノイマンにこう書いていた。

「僕が見るところ、頭脳の働き
は次第に理解できるようになって
いる。しかし、医者メンタリテ
イはこういう問題の解決には向い
ていない。医者というのは、普遍
的な思考や複雑システムの理解へ
知的に向き合うことがないのだ。
そのような課題には、物理学者や
数学者がよほど良く訓練されてい
る。この面では、部外者だけが、
医者や生理学者と協力して、適切
な圧力を加えることができると思
う」。

「受容する信号への感度と信号を
発する活力」は直前のインプット
に依存していよう。頭脳の状態は
特別なニューロンの状態によつて
決まっていよう。それぞれの精神
状態は、これらのデータの集合で
特徴づけることができる。これは
一つの会話が終わると回線が切り
替わるような、中央電話オペレ
ーションを想起させる。ますます複
雑化している技術的なネットワー
クから、もっと適切なアナロジ
を見つけることができるようにな
るだろう」。

ノイマンはこのアイディアを好
意的に受け止めている。

「生物学や量子理論についての
君の意見は、僕のものとは良く似て
いる。頭脳構造にかんする君のコ
メントはとくに面白い。旧来の幾
何学の枠組みでは、生物学の本質
的なプロセスが理解できないこと
を、もっと深刻に考えるべきだ

う。我々が局所化 (Localization) を強調しすぎると、相対性理論における離れた事象の同時性のケースや、量子理論における座標と運動量の同時測定の場合と同様に、矛盾や誤解に直面することになるだろう」。

信頼性のない部品を使って、どうやって信頼できる機械を設計することができのだろうか。ニユーンから成る頭脳の場合は、自然がこれを解決している。脆弱な市民から成る社会の場合は、民主主義がこれを解決している。一九四八年にプリンストンで行った講演で、ノイマンは「生命細胞のメタファーとしてコンピュータ」を論じ、オートマタの二つの主要な機能、機械(今で言うハードウェア)と蓄積された情報(今で言うソフトウェア)を区別している。その後、生命の主要な機能を代表するものが、代謝と再生産であること

が明瞭になったのである。こうして、ノイマンは近代物理学の先駆者でもあった。

その五年後に、フランシス・クリックとジェイムズ・ワトソンの偉大な発見が続いた。蛋白質素を機械と(代謝をおこなうハードウェア)、DNAをメモリと(再生するソフトウェア)同一視できるような発見だった。

未完の論文では、普遍のオートマタの限界的な規模、自己を再生し、さらには進化も可能な単純な細胞モジュールの組み立てを議論し、継続的に世代を生み出して行くような効率的なオートマタを構想している。

ノイマンはこれらのすべての発展を見ることなく、この世を去った。一九五五年八月一日、首の骨肉腫が発見された。それは前立腺癌が転移したものであった。当時、ゾルタン・ベイが彼を訪ねて、コ

ンピュータのスピード・アップについて議論している。その折、ノイマンはベイにハンガリー語でこう語っている。

「人々がどうして核エネルギーを恐れるのか理解できない。癌と診断されることの方をもっと心配すべきだ」と。

その数カ月後、ノイマンはアイゼンハワー大統領より自由の勲章を授与された。彼は車椅子でこれを受けた。そして、一九五六年初頭、入院することになった。政治家や将軍たちが病室にノイマンを見舞い、意見を求めた。まだジョニイはコンピュータを使って、経済、政治、軍事のシミュレーションができた。朝鮮戦争当時、ダグラス・マッカーサーが大陸中国を攻撃しようとした時、ノイマンのシミュレーションは得るものより失うものが大きいと出た。これで第三次世界大戦が阻止された。テラーが

書いているように、「ノイマンは誰よりも速く働く心を持った唯一の人間だと言われる」。

アインシュタインはノイマンをこう特徴づけている。*Neuman ist kein Säugtier, er ist ein Denktier*（ノイマンは哺乳類でなく、思考類なのだ）。なぜなら、乳を吸うことではなく、思考することが、彼にとって生命の条件だからだ。癌が脳を襲った時に、彼は放射線治療を受けようとしたが、それはもう手遅れだった。「ノイマンは凡人が生殖器を使うことに喜びを感じるように、頭脳を使うことに喜びを感じていた。だから、頭脳が崩壊していくのを体験することは、耐えがたいものだった。機密上の理由から、病室には将校が常に待機していた。錯乱状態でジョニーが国家機密を喋り出さないようにするためであった（もつとも、ジョニーのハンガリー語の

寝言は警護官に理解不可能だった）」。

ノイマンは『コンピュータと頭脳』を、最後の病床の中で書いた。彼の健康の悪化がもはや不可逆的であるのを知り、カトリックの信仰に立ち戻っている。

「多分、神は存在するだろう。神が存在すると仮定する方が、そうしないより、多くのものを説明できる」と。墓碑の前に、ブラドベリーはこう話した。

「もしジョニーがこれから向かうと考えた所にいるなら、そこでは現在について、非常に面白い会話がなされているに違いない」。

日本人会運動部報告

吉岡 直道

日本人補習校共催運動会 九月十七日(日)

個人的なことですが一〇年振りにハンガリーで運動会を担当しました。

一〇年前と何が大きく変わったのか？

まずは、ハンガリーに在留する日本人の数です。当時は、登録ベースで三〇〇人程度で(現在八〇〇人)、特に準備段階のスタッフの数は大きく違います。

次には、小道具、賞品が多様になったことです。

当時、賞品は全てウィーンあるいは西欧で調達せざるを得なかったのです。ハンガリーで買えるものでは

誰も喜んでくれなかったのです。小道具も同じで 例えば風船ですが、ハンガリー製は粗悪で競技前に殆どが割れてしまうので、ロンドンやデュッセルドルフに出張した際に買い求めておいたものです。

開会式は九時ちようどの予定であるが、そこはハンガリー、万事がゆったりしている。人の集まりをみて九時一〇分過ぎに開会式をスタートさせる。

来賓のご挨拶、国旗掲揚、準備体操(ラジオ体操)を終え、補習校生徒による短距離走で競技を開始した。昨年と異なり、スタート合図はピストルにした。(幼児の場合はホイッスルを使用した)やはりピストルのほうが気分が出る。何人もの方々の協力です。ピストルは日本から急遽輸入してきたが、紙雷管(火薬)が間に合わず、結局は昔使っていたチエコ製のピストルを磨いて再活用することに

した。

参加者は一〇時前に二〇〇人を超す。招待した Vranjos 小学校で日本語を勉強している生徒も校長先生・先生と二〇人以上参加している。

紅白玉入れ、パン食い競争、二人三脚、障害物、綱引き、渦巻きリレー、フンガロリング(三輪車リレー)、混合リレーと生徒達は日本人、ハンガリー人の区別なく真剣そのもの。ゲームに勝つための様々な工夫をしようとしている。

アナウンス係をやってくれた女子生徒達も徐々に上手くなっていく。大人達も、自分の体力に相談しながらも、時には限度を超えている模様で、童心に帰って元気一杯。

校長先生は、開会式の挨拶の時点から、一般最後の種目である八〇〇m走で頭が一杯の様。結果は、やっぱリダントツに早い一着。しかし、ライバルが帰国してしまった為、ちよつぱり寂しげ。

普段は、頭でつかち気味（体を動かす機会が少ない）の人達も、この日ばかりは、心身のバランスがとれた一日だったと思う。

万全の用意をした（？）救急班のお世話になる人も殆どなし。

最後に、プログラムの立案から運営まで担当して下さった補習校運営委員長並びに補習校の先生方、多忙にも拘わらず、準備と運営に骨を折って下さったスポーツ委員の方々、大使館の方々並びにごお母様方に厚く御礼申し上げます。

二〇〇〇年ソフトボール大会

第一回 五月一四日

早朝から臯月晴れ。お陰で決行するかどうかの決断に悩まされずに会場の準備に取り掛かれた。前任のJETRO菱木さんから引き継いだ最大の問題は、「雨天の場合で、決行するかどうかの決断」であった。

事前の心配など全く笑い飛ばすように好天気で、グラウンドに立つと早朝にも拘わらず、芝の緑が目痛いくらいである。

出場チーム数は過去最大の一〇チーム（アイウエオ順）。

伊藤忠商事 クラリオ

商工会 A 商工会 B 住友商事

ソニー 大使館・一般 デン

ソー マジャー・スズキ A

マジャー・スズキ B

早々と糠沢大使の御到着。やる気満々の御様子で上半身だけだと NY

ヤンキーズのコーチ然（NYヤンキーズのユニフォーム模様のスポーツシャツを着用されていました）。

馬力と持続力では若手に適わぬものの、壮年組はテクニクで対抗し、口だけでなく結構体も動く。

決勝戦は、クラリオンチームと大使館・一般チーム。クラリオンは一回戦こそ商工会 A チームに苦しめられ逆転で辛勝したものの、後は順調に勝ち進んできた。かたや、大使館・一般チームは、混成チームであるが若手の猛者揃い。大使が、どこで出場されるかがひとつの鍵。

結局は、大使館・一般チームの力勝ちに終わった。

優勝… 大使館・一般チーム

準優勝… クラリオンチーム

第三位… 商工会 B チーム

最高殊勲選手… 大使館・一般チーム

（補習校） 吉原選手

ホームラン賞… アルパインチーム

矢吹選手

二〇〇〇年ソフトボール大会

第二回 九月三日

会場であるFTCスタジアムが九月中旬から急遽改修工事を始めることになった為、当初予定の一〇月一日を繰上げて開催することとした。出場チーム数は夏休み明けということもあり八チームとなる（アイウエオ順）。

伊藤忠商事 クラリオン 商
工会A 商工会B 住友商事
ソニー デンソー マジャー
ル・スズキ

前回の優勝チームでブダペスト球史に燦然と輝く大使館・一般チームは夏休みの為、チーム編成ができなかった。次回に期待したい。

前夜半から冷たい長雨。九月三日当日は朝五時半でもまだ降り続いている。

六時になり雨脚が弱まり、東の空の雲が心なしに薄くなってきた。し

かし家の近くの土は十分に雨水を吸ってどろどろ状態。後は、会場の状態を見て決行するかどうかを見ることとした。但し、気持ちは半分以上中止の構え。

会場へ急ぐ途中、朝弱いはずの日本人会事務局員からモバイル電話がかかる。

「決行しないと、会員の皆様が文句を言われ、収まりがつきませんよ！」と叱咤激励（？）。

六時五〇分頃雨が上がる。しかしグラランドは水溜りが数カ所あり、ベア・グラランド部分はぐちゃぐちゃ。

芝生はつるつるにすべる。この状態では怪我人が大勢出る恐れあり。瞬時の決断はつかない。

しかし時は情け容赦なく過ぎていく。七時丁度。決行するか中止にするか決断の時。

正直、迷った。楽しい筈の催しで怪我人が大勢するのは、やはり避けたい。最後は一呼吸置いて決行する

ことを決断。

試合開始までに、芝生はいくらか乾くであろうと楽観的判断してである。直ちにスポーツ委員各位並びに出場チームの代表者に連絡する。案の定、何人かは当然中止と考えていたらしい。試合開始前には芝生が乾き始めた。胸をなでおろす。

目を見張ったのは商工会Bチーム。前回は三位に躍進したが、それまでは万年敗退組の一つ。それが厳しい監督と大勢の自称コーチの面々の下、打つは打つはで決勝までは毎試合20点以上の得点。それも巨人軍のような大味さはなく、徹底したピストル打線。その上に守備が良い。昨年までは現役で攻守の要の一人であった監督も出番はついにこなかった。流れに棹を指したくなかったのか？いや、それよりも監督業に徹するほうが二〇倍も楽しかった模様。

決勝戦は商工会B VS クラリオン。試合結果は主審の独断でクラ

リオンのエースが途中退場となった
為七二の大差となるが、実際は両チ
ーム共守りの随所にファイブ・プレ
ーがあり、決勝戦に相応しい大変締
まった好ゲームであったと言える。
三位は住友商事で、チーム編成二
回目且つぎりぎりの人数で勝ち取
ったのは立派。

聞くところによると、ソフトボー
ルそのものの練習もさることながら
ジャンケンの練習も十分やったとか。
一回戦の対デンソー戦でジャンケン
で圧倒的な勝利を収めた後は破竹の
勢いであった。

優勝… 商工会 B チーム

準優勝… クラリオンチーム

第三位… 住友商事チーム

最高殊勲選手… 商工会 B チーム

(豊田通商) 江田選手

ホームラン賞… ソニーチーム

鷺田(トキタ)選手

全てが終わって見れば、雨で決行
するかどうか悩んだことなどどこ吹

く風。

開催できたこと、しかも怪我人も
殆どでなかったことを感謝する。

(口さがない委員からは、幹事の「悪
運」の強さとか、悪運も結構。「運」
にも感謝。)

最後に

この行事をもってハンガリー日
本人会の二〇〇〇年度のスポーツ行
事を全て無事終了致しました。

企画・準備段階から運営まで、公私
共御多忙な筈にも拘わらず、常に協
力的な姿勢で担当役割のみならず全
体を調整しながら運営して下さい
スポーツ委員会社の各位にあらため
まして御礼申し上げます。本当に有
り難うございました。

又、行事に積極的に参加して下さい
た方々にも御礼申し上げます。来年
の行事にもこそぞって参加願います。

お知らせ

第八回日本語スピーチコンテスト

十月二十一日(土)、午後一時より、日本大使館講堂において、大使館、国際協力事業団、国際交流基金、日本航空ウィーン支店の共催により、日本語スピーチコンテストを開催します。

今年で八回目となるこのコンテストでは、日本語を学習している高校生・大学生の皆さんが日頃の成果を披露するとともに、昨年の優勝者が賞品の日本往復航空券を利用して訪日した際の体験談発表、各種アトラクション、来場者への記念品抽選会などもおこなわれます。

在留法人の皆様にも是非ご来館いただき、学生たちへの応援をよろしく願います。

オリンピックク・ハンガリー金八個

オリンピッククに沸いた今年の初秋、日本選手の活躍も目立ったが、ハンガリーは閉会間近の数日に、得意のカヌーで金を量産。予選で苦戦した水球も終わってみれば、久々の金。予選リーグで韓国に破れた女子ハンドボールは決勝まで進み銀。メダルラッシュで終わりを締めた。

女子平泳ぎのコヴァーチ、最後のスパートはもの凄かった。ハンガリーのお家芸は生きていた。今年の持ちタイムがそれほど良くなかったので、日本水連などは田中雅美のライバルにはならないと考えていたようだが、外国選手がオリンピッククにピタリと調子を整えてきたのにたいし、日本選手権をピークで闘った日本の女子選手は、田島を除き、オリンピッククを最高の状態で迎えることができなかったようだ。短期間に二度のピークを作るのはたいへんなのだ。

千葉ですが日本選手権は選考枠に入ることだけを目標にし、オリンピッククに照準を合わせたことに、水連幹部は、千葉は選手権をなめている」と考えたようだ。が、実績のある選手なら、選手権のタイムは悪くても、最終調整にかけるべきだった。

同じことは室伏にも当てはまる。七月のブダペスト国際で逆転優勝して波に乗ったと思われたが、経験不足がもろに出た。雨に濡れたサークルに気を取られ、まったく集中できていなかった。ハンガリーのテレビでは、ハンガリー系ルーマニア人を母に持つ室伏と紹介されていた。この経験を次に活かしてもらいたい。

編集室より

次号の締め切りは、一月中旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 266-4967

e-mail: t-morita@hungary.net